
名探偵コナン 短編集

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン 短編集

【Zコード】

N4971Z

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

リクエストOK!! 名探偵コナン短編集

新蘭、コ蘭、平和、快青、新志、コ哀、

となんでもあります

恋愛ものから組織ものまで場面はざらりのうのでも構いません

<

> - -

気軽にリクエストお願いします (^ ^") - III

Five・1 露出狂の白雪姫（前書き）

こんにちわ 短編集はぢめました

リクエストお待ちしております・・・▼+

リクエストは…

?カッティングは誰と誰か

?大ざっぱで良いのでどんな場面で

?どうなつてほしか

をお願いします

今回は星野由佳里さんのリクエスト、新蘭で文化祭です

「ではこれで決まりです」

キーンゴーンカーンゴーン…

教卓に立つ教師がそつそつとタイミング良くチャイムが鳴った

やつ、いじは帝丹高校

間近に迫る文化祭での出し物の劇の役がビーツやら決まつたよつだ

黒板に書かれた“白雪姫（特別バージョン）”

その横に並んで書かれた配役

王子様…工藤新一

お姫様…毛利蘭

まあ、いつものパターンだ

だがこの白雪姫（特別バージョン）の台本を書いたのは…

「ねえ蘭 面白いでしょう？」の台本」

陽気に話す鈴木園子だということを忘れてはいけない

「ちよつと何なのよこれ～」

「あら～、お姫様が一人いちや不満なの～？」

そういう白雪姫（特別バージョン）にはお姫様が一人出でくるのだ

王子様は当然園子が推薦した新一

お姫様Aも当然園子が推薦した蘭

そしてお姫様Bは新一「LOVEな女子達を追つ払つて自分で立候補した園子だ

これには色々とわけあらじい

「蘭がまだ新一君にロンドンでの告白の返事しないから」「わざわざ」とになるのよ～」

「はあ？なにそれ？ビーフやうひ」と～へ。」

「んまあ 当日のお楽しみよ。」

鈴木財閥の令嬢は何でもありだ

「新一君も、最高の劇にしてよね～」

今にも寝そうな新一に向けて園子はそう言った

「あん？あ……」

文化祭当日

舞台裏では劇の順番が2年B組に迫っているために慌ただしかった

そんな中で

「わあー 蘭最高～」

自分が用意した衣装のドレスを着た蘭を見て瞳を輝かせる園子

「ねえ…なんかこれ白雪姫とは違くない?」

「セリフ?」

「だつて白雪姫つてこんな園子みたいに露出なんてしてないよ?」

園子オーダーのそのドレスは一応配色やデザインは白雪姫っぽくなつてしているのだが

お尻がやつと隠れるくらいの超Hで

胸元がガツツリ開き谷間が見えている

ところのような衣装だつた

「これじゃあ恥ずかしいよ~」

「大丈夫、大丈夫 じゃあ私新一君の様子見てくるから蘭はそこから出ちゃダメよ~?」

そう言って園子は更衣スペースから出ていった

File・1 嫉妬する王子様

「新一君 入るわよ～」

そう言つて新一を覗くと

「お～！～～いじゃない～」

いかにも王子様がそこには居た

「これやつすぎじゃねえのか？」

「いいのいいの そのくらいじゃないと蘭に負けちゃうのよつ」

「蘭はどうゆう衣装なんだ？まさかこんなキラッキラしたよつなドレスとかじやねえだろうな？」

新一は横目で園子に聞いた

「キラキラしてたら蘭の美人さが増して新一君大変だもんね～」

嫌みつたらしく園子が言つ

「大丈夫よ キラキラはしないから～」

「ほんとかよ…」

不満そうな顔でボソッと呟く

『それでは2年B組で白雪姫、特別バージョンです』

いよいよ劇が始まった

『あるとこで白雪姫といつお姫様がいました…』

舞台上に光が浴びせられ蘭が登場する

「わあ～」「
「かわいい～」「
「毛利先輩、付き合つて～」

その蘭の姿に劇を見ていいる観客や後輩達はさう歓声をあげた

舞台裏で出番の準備をしている新一は

(そんなに?…)

まさかの一回のコアクションに驚き妬む

『白雪姫は実はもう一人いたのです…』

そして園子が登場する

「お～ほつほつ、王子様と熱い口付けを交わすのは私よ～」

蘭と似たような衣装なのに誰一人として興奮するものはいない
それどころか皆そのなりきつてている演技にひいている

『や～に来た王子様は白雪姫が一人いでビックリ…』

といひでやつと登場した新一

「おお、なんて美しい…姫…君…た…ち…」

新一は蘭を見てその美貌に惚れるものの

(やあ～のや～)お――――――――

一気に園子に対し怒りが芽生えた

「さあ 王子様どうか私と熱い口付けを…」

そんなものはおかまいなしに演技に没頭する園子

「いいえ、どうか私と口付けを…」

蘭も新一の前で恥ずかしがりながら演技に集中する

「これは困りました…

ではどちらが私にふさわしいか毒リンゴで…

「いいえ！私よ…！」

突然力強くそう言つた園子

2年B組のクラスメート達は啞然とした

なぜなら…

(園子？…間違えた？今は新一の見せ場で、そんなの台本になかったけど…)

File・1 小悪魔なお姫様

「ああ、王子様、早く。」

近寄る園子に新一が小声で

「おめえ、間違ってるぞ」「へ？」

やつわれた園子はニンマリした

(えっ?…)

訳の分からぬ新一と蘭

だが園子の演技は続いた

「さあ、王子様…

あんな姫なんかよりも私を

そう言いながら新一の腕を掴む

「や…園子?…」

「早く私と熱い口付けを…」

園子はやつらと新一の顔に唇を近付ける

「お、おい！いい加減にしろよな！」

観客達は真剣にその行く先を望んだ

「あん 王子様」

園子の甘い声が飛んだ瞬間……

思わず叫んだ蘭

それを聞いた園子はまた一ソマリする

「わ…私は…」

「あら？ あんた王太子の何なの？」

まさかのアドリブに困惑の蘭

「あんたも王子様と口付けを交わしたいのかしら?」

何かを企む園子は言った

最早“お姫様B”ではなく“鈴木園子”だ

「お…王子様と口付けを交わすのは私です」

台本のままの台詞を言つて蘭に園子は嫌気がさし更に小悪魔になった

「バカね、王子様は私が好きなのよ」

やつ言つて園子は新一に抱きついた

(園子、後で覚えてるよ…)

園子の作戦が読めた新一は心の中でやつ言つた

その瞬間“あーーーー”と思つた蘭は王子様の元へ駆け寄つた

「私は王子様が好きよ …

あんたはどうなの?はつきりしないと私が唇を奪つてしまつわよ」

最早“白雪姫”でもなければ“白雪姫（特別バージョン）”でもない

「私も……私も王子様が……好きです……」

「それで？口付けを交わしたいのかしら？」

「えへだつて今は劇中だからそんなこと言ふなよ～」

小声で園子にそつと蘭は完全にパークつている

「バカね、これは劇なんだから台本通り“はい、したいです”って言えばいいのよー」

そう返された蘭は

「はい、私も王子様と口付けを交わしたいです……」

よし、と思った園子はあとひつしーと最後の台詞を言おうとした
……が

「ならば王子様ひづちらが良いか選んで……ってあれ?…

Five・一愛の口付け

「今まで散々な目に遭わされた新一はやつてやつた

園子の口詞の前に

抱きつく園子を払いのけ

蘭の腕を引き寄せて

自分の胸へと包み込み

抱き締めて

蘭の唇に自分の唇を重ね合わせた

それを見ている観客は呆然として中には鼻血を垂らす者もいた

(ちよつとー? 新ーー?...)

「んーんー」

蘭が喋るのになるとすると

「黙つてろ

そう一言だけ言い

再び唇を重ね合わせた

蘭の格好を目の前にする新一のキスはだんだんと深くなつていこう
とするが…

「『みやつと、新一君!』」

まさかの園子の止めが入り急遽幕が降ろされた

そして幕の向こう側では…

「おー!! 探偵坊主!! おめえ人の娘に手エ出してただで済むと思
うなよ!! !!」

怒鳴り散らす小五郎がいた

「新一…何やつてるのよ…」

蘭はクラスメート達を田の前に動搖した

「嫌だったか?」

もしかすると新一の方が園子よつ小悪魔だ

「嫌つてことないけど…」

「中々返事しないからいつもこのことになるのよーお~ほほほほ…まあでもこんな風になるのは予想外だったけど…、これに懲りたら蘭早く返事を新一君にしてあげなさい」

そう言われた蘭はクラスメートを一通り見回す

皆は今か今かと言わんばかりの顔で蘭を見つめている

「あの時の返事…今してもいいかな?」

「ああ

「私…、

私も…

私も新一のことが好き…」

その瞬間一気に騒ぎ出したクラスメート

「ヒュー、ヒュー、」

「遂に結婚か〜」

「よつ〜！」「藤夫妻〜！」

「おめで～りうれしい～！いい加減にしろよ、これからが見せ場なんだからよおつ！」

そう言つと新一はまた蘭を抱き寄せて

怖いくらいの包容力で包み込み

蘭の唇へまた熱い口付けをおとしたのだった

END

File・1愛の口付け（後書き）

ありがとうございます
お疲れ様でした。

いやー蘭ちゃん羨ましいです（笑）

感想お待ちしておりますー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4971z/>

名探偵コナン 短編集

2011年12月16日23時48分発行